【特別・嘱託・協同研究員の研究】

【要旨】人口減少地域における宗教施設の役割に関する予備的検討

―岐阜県揖斐川町春日美束におけるアンケート調査より―

磯部　美紀・阿部　友香

大谷大学真宗総合研究所・一般研究木越班「人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究」（科学研究費助成事業・基盤研究（C）、21K00075）はこれまで、人口減少地域を対象にその地域の宗教動態（宗教意識や宗教的役割の動揺や変容）と当該地域における寺院の社会的役割について研究を行ってきた。2021 年度は岐阜県揖斐川町春日地区美束地域の在住者を対象に「地域と寺院に関するアンケート調査」を実施した（回収率 38.0％）。本稿では、本アンケート調査によって得られたデータを分析することを通じ、人口減少地域における伝統宗教及び宗教施設の社会的役割を、岐阜県揖斐川町春日地区美束地域を例に考察する。尚、分析の過程でアンケート協力者の一部に対して 2022 年 6 ～ 9 月に実施したインタビュー調査のデータも補足的に用いる。本稿が分析の対象として取り上げるのは、上記アンケートによって得られた、地域住民および地元を離れた「他出家族」（アンケート回答者本人からみた同居していない「きょうだい」と「子」について尋ねることにより「他出家族」を析出した）が当該地域の宗教施設（寺院・神社）を訪問する機会についてのデータである。本データを分析することを通じ、当該地域における宗教行事や宗教施設は人々（住民及び他出家族）が集う機会や場を提供していることを明らかにしたい。

人口減少地域における宗教施設の役割に関わる先行研究を踏まえて、ここでは本稿の射程を研究対象と分析の視点に注目して 3 つの観点から示す。第 1 に、寺院あるいは神社のどちらか一方のみを研究対象とするのではなく、地域における重要な宗教施設としての寺院と神社に焦点をあて、人口減少地域において果たす役割に関して両者の共通点や差異を明らかにする。第 2 に、これまで本研究班が主に調査してきた宗教者側（寺院）ではなく、地域の生活者およびその他出家族

の動向に注目して分析する。第 3 に、宗教施設に注目する際には、非日常的な関わり（行事や祭りなど）のみならず日常的な関わりのあり様も含めて検討する。これにより、広く地域における宗教施設の役割を捉える。

調査地である岐阜県揖斐川町春日地区は、岐阜県南西部の山間に位置し、粕川が形成した谷沿いの地域である。3 つの地域からなる春日地区のうち、本稿では美束地域に焦点をあてる。春日地区ではかつては地勢を活かして林業や炭焼きなどが盛んに行われてきたが、高度経済成長期以降、若年層を中心に粕川下流の平野部へ人口が流出し、人口減少や高齢化が進展している。また東本願寺第 12 代教如上人ゆかりの地であり、真宗大谷派の寺院が数多く立地する。寺院に関わる活動においては、美束地域内での緩やかなつながりが見られる。

ここからはアンケート調査の結果のうち、地域住民（回答者本人）と他出家族それぞれの宗教施設への関わりを見ていく。寺院への訪問機会を複数回答で尋ねた結果を示したのが図 1 である。回答者本人に関しては、「報恩講」、「永代経」、「五日講」の参加率は高いが、「お彼岸」の参加率は低い。また回答者本人による「墓参り」は 30% 台に留まるが、これは美束地域の墓制に関連すると考えられる。神社への訪問機会を複数回答で尋ねた結果が図 2 である。回答

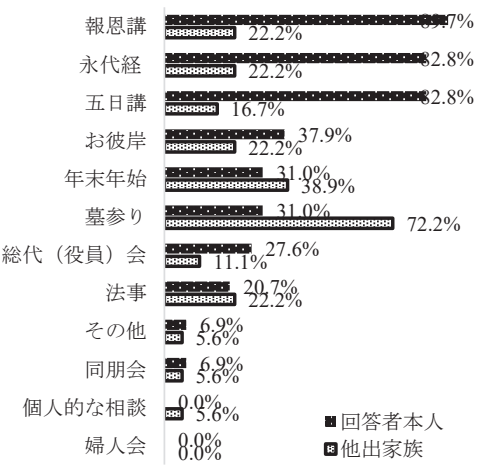

図 1　寺院への訪問機会（複数回答）

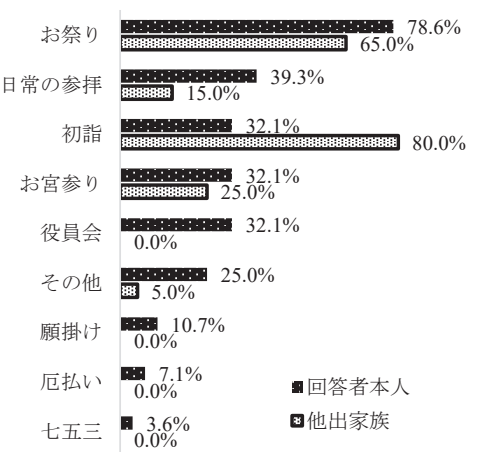

図 2　神社への訪問機会（複数回答）

者本人については、全ての項目で回答があることから年中行事や人生儀礼、個人的な参拝など様々な機会に地域の神社を訪れていることが分かる。そして他出家族は、年末年始など、帰省に合わせて神社を訪問していることが分かる。ただし、他出家族については、神社への訪問が帰省のきっかけとなる場合もあることに注意が必要であり、「お祭り」はその最たるものであろう。帰省に合わせて神社を訪問するのではなく、「お祭り」に合わせて帰省しているのである。

続いて、寺院・神社への訪問機会を尋ねる際に用意した選択肢を、「個人・家族に関わるもの」と「地域や組織に関わるもの」に分類して分析する。

寺院の訪問機会を 2 つのカテゴリーに分類した結果が図 3 である。回答者本人に関しては、「報恩講」や「五日講」をはじめとする「地域や組織」に関わる機会に寺院を訪問する割合が高い。報恩講および五日講は、門徒が手次寺以外にも美束地域の他の真宗寺院を訪れる機会となっており、住民同士の交流を促し、さらには地域としてのまとまりを維持していくことに寄与する。他出家族の場合は、「個人や家族」に関わる機会に寺院やお参りをする傾向がある。「墓参り」、「永代経」、「お彼岸」はいずれも、家の系譜に属する死者を縁にして行われるものと見なせることから、死者という存在をきっかけに村落内外の家族が寺院や墓に集っている。また他出家族は、「報恩講」や「五日講」など「地域や組

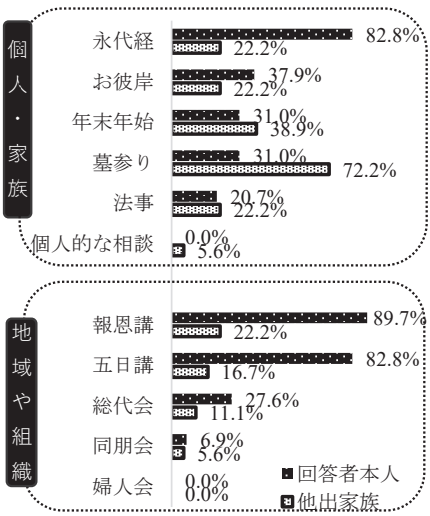

図 3　寺院訪問機会の二分類

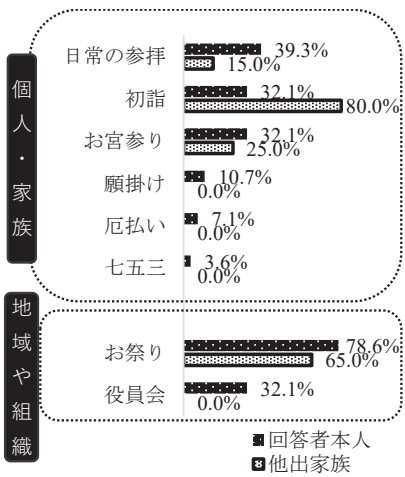

図 4　神社訪問機会の二分類

織」に関わる機会にも寺院を訪れている。「個人や家族」に関わる項目ほど参加率は高くないものの、これらの行事は一部の他出家族が美束地域に帰省する機会になっている。

続いて神社への訪問機会を検討する（図 4）。神社への訪問機会の項目のうち、「地域や組織に関わるもの」に分類したのは「お祭り」と「役員会」である。「お祭り」は回答者本人（78.6％）、他出家族（56.5％）ともに神社への訪問機会として高い割合を示している。祭りは他出家族の帰省を促すひとつの機会であり、他出家族が美束地域の住民と交流をもつ機会、すなわち地域の内外に暮らす者どうしの紐帯に寄与していることは指摘できるだろう。一方、「役員会」は居住者のみが関わりをもっていた。「個人・家族に関わるもの」に分類した項目のうち、家族の紐帯と強く関わってくるのは「お宮参り」、「七五三」である。「お宮参り」と「七五三」については、出生に関わる儀礼である「お宮参り」のみ他出家族の神社への訪問がみられ（32.1％）、祖母が儀礼において役割をもつことから他出家族の帰省が促されていると考えられる。人生儀礼において出身地の氏神に参ることが必ずしも重視されなくなった現代においても、「お宮参り」は家族にも地域にも紐づく宗教行事として残っていると言える。一方、「七五三」や「厄払い」、「願掛け」は、他出家族にとっては場所を問わない宗教行事となっていると考えられる。

本稿では、岐阜県揖斐川町春日地区美束地域の住民を対象に実施したアンケート調査の結果をもとに、人口減少地域における寺院と神社の役割を検討した。今回の調査では、村内の居住者と他出家族それぞれについて宗教施設への訪問機会となる具体的な行事・機会を尋ねることで、寺院と神社とでは、そうした宗教施設と人々の関わり方が異なることが明らかになった。まず寺院は、「家」という単位（家族の一員として生者のみならず死者を含む）と親和性をもつことに特徴づけられ、家の系譜に基づく死者の存在を契機としながら村落内外の家族が集う場に関与するとともに、地域・組織の行事への参加という形で居住者および他出者が関わる側面を持ち合わせる。次に神社は、お祭りへの回答が突出していたように地域行事の場としての側面が確かに目立つものの、日常の参拝や人生儀礼など個人や家族としての関わりも少なくない。前者への居住者の参加の仕方は、村における「一軒前の家」を単位としている可能性が考えられるが、後者への関わり方はより個人化されており、「家」を単位とするのではなく今生きている者に

よって構成される「家族」や個人を単位としていることが読み取れた。そして、寺院と神社いずれにおいても、行事や訪問機会の性質によっては、他出家族が美束地域に帰省する契機となっていることが明らかになった。

今後の課題として、本アンケート調査において他出家族に関するデータは間接的なものであるため他出家族に直接アプローチする調査が必要であること、宗教施設への訪問機会の各項目に対する評価・認識に関して住民およびその他出家族への聞き取り調査を通して把握する必要があることが挙げられる。